

看護のアジェンダ

井部俊子
株式会社井部看護管理研究所
聖路加国際大学名誉教授

看護・医療界の“いま”を見つめ直し、読み解き、未来に向けたアジェンダ(検討課題)を提示します。
〈第222回〉

看護のアントレプレナーたち

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策によって求められていた自粛が解かれ、長く分断されていた人々が動き出した。

2019年9月に、井部看護管理研究所に“相談”に来てくれたサワダさんが3年半ぶりにやって来た。「代表取締役社長/CEO 看護師」という名刺を持って。当時、サワダさんはナースコールの改良を考えていた。「ナースコールは看護師の業務を中断する。ナースの多忙さを増しナースが忙しいことが患者に不利益をもたらすことを体験的に痛感したので何とかしたいのだ」と熱く語った。はたしてナースコールは“業務中断”と考えるべきか、そうではないのではないかと、私はサワダさんに反論した。

その議論の結果から生まれたのが「予測と不測——ナースコールの進化と看護」(本連載第178回)である。少し内容を紹介しますと、サワダさんは「ナースステーションでキャッチするナースコールは、ある調査によると4分に1回という頻度であり、ナースの業務中断をもたらす。頻繁な業務中断はナースの労働環境としても不適切ではないかという問題提起」をした。そして、「ナースコールを使用する患者があらかじめ画面に表示された要求内容(トイレ、食事、薬、痛い、眠れない等)を選択してナースをコールしてもらうという考え」であった。この考えに対して、私はこう述べた。「ナースが予測に基づくケアを行ってれば、ナースコールの回数は激減するであろう。そうすると、患者がナースコールを押すのはナースが予測できなかったニーズ、つまり不測のニーズである」ため、ナースコールは業務中断ではなく、それどころか優先度の高い患者のニーズの表明であり、これこそが看護実践ではないかと。

その後サワダさんは、東京都主催の起業家支援プログラムに応募して、約2000組の応募の中から最終10組の起業家に選出された。彼女はその時のメールに、「私なりの形で看護に貢献したい」と書いている。

患者説明の業務を効率化したい

3年半が経過して、サワダ社長のビジネスはこのように発展していた。外来で、看護師が患者に対して行うさまざまな「説明」を動画とメッセージで半自動化し、スマートフォンでみることができ「ポケさぼ」を開発して事業化したのである。

ポケさぼのチラシによると、ポケさぼでできることは、①スタッフによる患者説明を、患者が理解しやすいオリジナル動画やLINEメッセージで案内する。これによって、対面で行っていた説明がコンテンツ化され、説明時間が短縮される。②入院日や検査日に向けて、メッセージが自動配信できるので、患者のプリパレーションを当日まで誘導することができる。これによって、入院や検査前日の受付場所の案内や書類等の持ち物のリマインドとなり、トラブルを防止できる。③患者からのちょっとした質問をテキストで受

け付ける。これによって、電話によるその場の対応ではなく、テキストによって落ち着いた時間にまとめて返信できる。こうして、ポケさぼは、説明時間の短縮による業務負荷軽減、ペーパーレス、スタッフ教育への利用、待ち時間の短縮、そして高い患者満足度という5つの効果を上げることが可能となる。導入事例として紹介された施設では、入院説明、妊婦への情報提供、術前外来での麻酔説明、大腸検査説明に用いられる。

ポケさぼは、目下、30施設に導入され、サワダさんは従業員6人を雇用する株式会社の社長である。「経営は楽ではない」と言いながら、看護へのリスペクトがある。「ポケさぼが看護師の手足となれるか。病院の院長や事務系の金銭感覚も考えて、商品の売り込みを精力的に行っている」と語るサワダさんは、輝いていた。

看護記録を合理化したい

サワダさんの訪問から10日後、もうひとりの社長がやって来た。彼女は、看護業務における記録の合理化を考え続けている。そこで、入院時のアナムネをタブレット入力してもらい、それを電子カルテに移行するというシステム開発に挑んでいる。大手の電子カルテメーカーが門戸を開いてくれないため、現在試行中の施設では、看護師がマニュアルで電子カルテに入力しなければならないのだと、地団駄を踏む。開発途上であり、協力してくれる施設をみつけるのが困難を極めているのだ。“業者からの売り込み”に偏見が大きく、説明すらも聞いてもらえないと嘆く。

彼女とは彼女が学生時代にスターバックスでアルバイトをしていた時に親しくなったのだが、そのスターバックスでは、各店舗におけるオペレーションは標準化されていて、A店が多忙だとB店から手伝いに行く。それでもちゃんと仕事ができるのだという。看護はともすると、同一の病院のなかでも病棟ごとに違いがありオペレーションが多様化している。ケアのパッケージ化とオペレーションの標準化をもっとやったらいいという話になった。

彼女の構想には、ケアを提供するナースとそれらを記録するディクテーションナースを分担したらどうかというアイデアがある。「どう思いますか」と、恐る恐る私に問うた。私は賛成だと答えた。実践したケアの内容や観察した事項、患者の反応など、その都度ナースがその場でつぶやくことで次々に記録される。ケアが終了すれば、記録も完成している。これは素晴らしい。

昨今、臨床現場で経験した「不合理なこと」に対し、あえて職場を退職して、本気で問題を解決しようと取り組む若者に出会う機会が増えた。彼女・彼らは一様に、看護をリスペクトしており、現場をよくしたいという情熱を持っている。



他者理解を促すためのブックガイド

小川公代
上智大学外国語学部
英語学科 教授

ケアを行うに当たって、自身とは異なる内面世界を生きる患者=他者を少しでも理解しようと努めることは、大切なアティチュードです。とは言え、他者を理解することも、そうした姿勢を維持することも、なかなか難しいのが実際のところ。本連載で紹介する書籍や物語作品は、他者理解に臨む上でのヒントを与えてくれるはず。気になる作品を見つけたら、ぜひ手に取ってみてください。

第9回 クロノスの時間とカイロスの時間

イギリスの作家ヴァージニア・ウルフは、行動面では性規範に縛られてしまう女性たちが実は豊かでみずみずしい内的世界を備えているさまを小説に描いた。そして、その語り可能な「意識の流れ」と呼ばれる、当時モダニズム作家らが用いていた手法である。例えば、ウルフの代表作『灯台へ』(1927)では、ディナーが終わりに近づいている場面で、ラムジー夫人の内面世界に分け入っている。「お開きの時間だわ。みんなお皿に残ったものをつつきまわしているだけ。ひとまず、主人(筆者注:ラムジー氏)の話にまわりがひとしきり笑うまで待つとしましょう」という意識の声を彼女に語らせるのである¹⁾。

ジョルジョ・アガンベンは、近代人が前提とする時系列の「経験を可能なかぎり人間の外に、つまりは道具と数のなかに移し換えていく」時間を「クロノスの時間と呼んだ²⁾が、ラムジー夫人はそれとは反対の、経験と質的な変容を伴う「カイロスの時間」を生きている。「カイロスは、さまざまな時間をみずからのうちに集中させる」、そういった深い時間である²⁾。おそらく性規範に苦しんだウルフにとって、あらゆるものが数値化されてしまう時間感覚の対極におかれる「カイロスの時間」、あるいは抑圧される女性たちの主観的な時間を表現することは救いだったのだろう。

ウルフの親しい友人でもあった作家E・M・フォースターも『ハワーズ・エンド』(1910)において、主観的な「カイロスの時間」を生きるマーガレット・シュレーゲルおよび彼女の妹ヘレンと、あらゆることを数値化し「クロノスの時間」を生きるヘンリー・ウィルコックスとを対比させている。ヘンリーは何よりも財産や自分の利益を優先させるが、マーガレットたちは金銭的価値以上に、人と人との関係性や他者への配慮といったものに思いをめぐらせる。

ヘンリーとのちに結婚するマーガレットだが、彼の利己的な生き方が理解できない。ヘンリーは、シュレーゲル姉妹の友人であるレナード・バスの勤め先である火災保険会社が年内に破産するという誤った情報に基づき、早く辞めるよう助言するのだが、その結果、レナードは失業してしまう。しかし、ヘンリーはその責任を取ろうとしない。というのも、彼はパーティで、かつて自分の情婦だったジャッキーと遭遇し、彼女がレナードの現在の妻であることを知るからだ。彼はマーガレットが悪意を持ってわざとジャッキーを連れてきたのだと誤解し、頼まれていた失業中のレナードへの援助を拒む。

マーガレットは損得でしか物事を考えられないヘンリーに幻滅し、実際には語られないジャッキーやレナードの「カイロスの時間」を代弁し、彼らを擁護する。「一人の女を玩具にして、それから捨ててその女のために他の男たちにその将来を棒に振らせる。そして碌でもない忠告をして、その責任は自分がないという。あなたはそういう男じゃありませんか」、そう言い放っている³⁾。

マーガレットのモットーは「謙虚でいて人に親切にすることを心がけてどんなことにもめげないで、人を憐れむよりも愛し、困っている人たちを忘れないで」いることである³⁾。こうして、困っているレナード夫妻の人生にも想像力をめぐらせ、人と人の結びつきを肯定するヒロインのケア精神が立ち現れるとき、ウルフがもっとも尊い資質として描いた反近代的な「カイロスの時間」がフォースターの文学の特徴でもあったことが見いだされる。『ハワーズ・エンド』は、アンソニー・ホプキンス主演で映画化されているので、見てみてはどうだろうか。

参考文献

- 1) ヴァージニア・ウルフ(鴻巣友季子訳). 灯台へ. 世界文学全集II-01「灯台へ/サルガッソーの広い海」. 河出書房新社; 2009. p140.
- 2) ジョルジョ・アガンベン(上村忠男訳). 幼児期と歴史——経験の破壊と歴史の起源. 岩波書店; 2007. p27, 179.
- 3) E・M・フォースター(吉田健一訳). ハワーズ・エンド. 河出書房新社; 2008. p434, 100.



大きな変更点がありますか?—「はい」プラマニユはいつも現場の変化とともに

新刊 **感染症プラチナマニュアル Ver.8 2023-2024**

▶感染症診療に必要なかつ不可欠な内容をハンディサイズに収載。必要な情報のみに絞ってまとめ、臨床における迷いを払拭する。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の記述を大幅に刷新。新規ガイドライン(敗血症など)と、臨床に直結する新旧の主要論文約150本の情報を更新するなど、Dr.岡+新たな執筆協力者27名の布陣による大改訂。全体で約40ページ増。既刊『ASM臨床微生物学プラチナマニュアル』と『微生物プラチナアトラス』とリンク継続。拡大版(Grande)も同時発売。若手・ベテラン問わず、医師・ナース・コメディカルのみならず。

著: 岡 秀昭 埼玉医科大学教授/総合医療センター病院長補佐/総合診療内科運営責任者/感染症科・感染制御科運営責任者

定価2,530円(本体2,300円+税10%)
三五変 頁636 図9 2023年
ISBN978-4-8157-3073-4

TEL.(03)5804-6051 http://www.medsi.co.jp
FAX.(03)5804-6055 Eメール info@medsi.co.jp